

その他

回想・台湾そして引揚げ

愛知県 人見 健

一、幼き時代の台湾の印象

近ごろ自分の年をつくづく眺めることが多い。そして、その奥には必ず台湾が浮かんでくる。

私にとって台湾は幼き日の懐かしい思い出と戦中・戦後の苦しい思いが重なって複雑な心境です。確かに、引揚げという苦しみは味わったが決してそれがすべてでなく、自分の気持ちの持ち方で、「ああ、その苦しみは、自分を作ってくれた一部なのだ」という気持ちになっっています。

私の父は、調理師で私に物心がついたころは、台南市のある料亭で包丁をにぎっていました。当時、私は台南市南門幼稚園に通っていました。家のすぐ近くには天崑廟があり、台湾の華やかなお祭や、仮装行列、時々行われる仮設舞台での京劇は、子供心に大変印象的でした。やがて南門小学校に入学し、私たちは満州事変や日支事変を背景に、戦時中の教育を受け始めました。でも、子供だった私には台湾人と中国とのつながりはわからず、ただ台湾人のお祭や京劇の音楽やドラをはじめとするリズム楽器の「キツ・キツ・コワーン。キツ・キツ・コワーン」にひかれ、よく、まねして遊びました。

台南市の町並の思い出として、銀座通りがあり、五階建ての百貨店があり、銀座通りに交差した東の通り

には立派な台南神社があり、交差した西の通りには東京の歌舞伎座と全く同じ造りの「都座」がありました。特に出し物の勧進帳は、おぼろげながら記憶に残っています。その都座には台湾人もよくきていました。

また、当時、台南市の道路のほとんどが舗装されていました。台南市だけでなく小さな町も割に舗装されていました。後に引き揚げてきて気付いたのですが、日本の道路との違いに日本の植民地政策を窺うことができます。

昭和十五年一月、父は神戸で店を持つため親子三人で帰国しましたが、その年の二月十五日あつけなくこの世を去りました。母の親兄弟がほとんど渡っている台湾に私たち親子は向かいました。

戻ってからの台湾での生活は、幼い時とは違って、台湾独特な雰囲気を感じるようになりました。私には母一人、子一人という状況で今までのような気持ちのゆとりも、子供ながら遠のいていたのかもしれない。母との生活は台中州大甲郡清水街から始まりました。清水には素晴らしい水源地があつて、「水の町」と言

われ町の雰囲気も美しいところです。私は清水小学校三年生、母は清水南公学校の教員という再出発でした。小学校はだいたい日本人、公学校は台湾人の子供たちです。小学校と公学校の交流は先生方は人面はありましたが、児童同士は、あまりなかったように覚えていきます。ただ、家へ帰ってから近所の台湾人の友達とよく遊びました。やがて両校とも国民学校になり、お国のための奉仕作業の多い日が続きました。

二、戦時下の学校

奉仕作業で記憶に残っているのは、清水神社の掃除や草取りです。清水神社は台南神社にも負けないくらい大きな神社でした。学校から徒歩で約三十分ぐらいおしゃべりをしないで黙々と歩くか、軍歌を歌つての往復でした。太平洋戦争が始まってからの歴史の時間には、戦意を小学生ながらもあおり立てるような内容が盛り込まれ、当時の先生も大変だったと思います。運動会では、敵がい心を湧き立たせるような、いろいろな競技があつて、何も知らない私たちは夢中になってルーズベルトやチャーチル、そして蒋介石の頭を叩

いたものでした。昭和十八年ころから、出征兵士を送ることが一週間に一度はあったように思います。新卒で私たちの学校へ赴任された先生が、寂しそうな顔で出征兵士のたすきを掛け、見送りに来た人たちに深々と礼をされ、列車に乗られたのが、今でも心に残ります。もうそのころになると、勉強は、防空壕掘りや一番恐ろしい空襲に備えての退避訓練などの合間に、という感じでした。文字どおり戦時下の学校です。

昭和十九年、私は工業学校機械科に進学しました。私の進学の関係で、母が転任を認められ、花壇庄というところに越しました。ここから工業学校には汽車に乗ってひと駅という所です。「君たちはこれから少しでも敵国のことを知るために英語を勉強するのだ」と最初の英語の時間に先生から言われました。体育の時間が少なく、いちばん厳しい教練が時間数として多かったのだと思う。入隊している叔父に面会に行ったことがあります、そのときの軍隊の厳しさを自分たちの受けている教練と重ね合わせました。教練教官が学校全体をぐっと押さえているような、そんな雰囲気

を生徒である私たちは感じました。教練の時間中、生徒の意気が盛り上がらなかつたり、ミスをしたときは、前列、後列向かい合つての激しい対抗ビンタや、教官直接の猛烈なビンタは忘れられません。

教練の時間に「今日は教室だ」と言われ、教室で待っているとき教練教官が、少年航空兵の願書を示し「希望した者から出ていけ」と指示された。私は、もうこれを書いたらおしまいなのだ。日ごろ、目をかけてくださっている先生から「人見、お前は親一人、子一人なんだから希望するなよ」と、かねがね言われていることを思い出し、大変だったが書かないで、最後は見事にビンタをもらって終わった。あとから希望した友達の話を知ると、やはり親の承諾を得ての決着だったそう。あの時代は先生も教練教官もそれぞれの矛盾を持ちながら、苦しまれたことと思います。

私にとつてもう一つ忘れることのできないことは、友達の死です。鹿港の飛行場に動員に行った私たちが、爆撃の後の飛行場整備のため、土を運んでいたとき、警戒警報解除直後であったにもかかわらず、不意に二

機の艦載機が低空で、沖の方から飛んできて機銃掃射を始めました。とっさのことで伏せて、艦載機の去るのを硬直状態で待ちました。恐る恐る頭を上げて、私よりも前のほうで伏せていた友達を見ると、その瞬間友達に機銃掃射を浴びたのです。艦載機の去ったのを見てそばへ走って行くと、背中は血だらけで何とも言えない姿でした。私はただ心の中で友達の名を何度も何度も呼ぶのが精いっぱいでした。

昭和十九年に入って、アメリカの台湾に対する空襲は激しさを増しました。私の思い出の町台南市も空襲に遭いました。

私は花壇庄から通学するには汽車に乗るのですが、そのころ、艦載機は必ずとんでもないほど汽車を狙って機銃掃射をしました。とても危険だということで山に沿った道を、片道一時間かけて歩いて通学しました。もちろん自転車はありません。

十九年も押し詰まったある日、私は急性盲腸炎になり、彰化の病院に入院しました。そのときは母が大きくなった私をおぶって、花壇の駅まで行き、途中空襲

のないことを願って汽車に乗りました。幸い病院に着くまで何事もなかったが、肝心な手術の最中に空襲になり、防空壕に運ばれました。機銃掃射、そして遠くで爆弾のさく裂する音。どのくらい時間が経ったかやと手術再開、しかしもう余り麻酔は効かず「坊、男だから辛抱せよ」。とたんに痛さが頭を突き抜けたような感じでした。あとから「麻酔は少しでも戦地に送らなければな。でもよう頑張った」と言われた。それから退院するまで警戒警報ぐらいで空襲はなかった。

三、終戦後の台湾での生活

二十年八月十五日の朝、重大放送があるからということで、私たちはラジオのある家に集まった。放送の内容は雑音のため、はつきり聞き取れなかった。いつもと違う雰囲気は感じたが、翌日の新聞で全容がつかめた。当時、私たちの世代は、もうこれから空襲がないのでほっとした、という単純な受け止め方が、いま考えてみると心の中にあつたことは確かだ。また、台湾が外地という感じがしなかった。当時の日本人の勝手な見方だったかもしれないが、台湾人とのコミュニ

ケーションも十分取れていたという気持ちだが、強くあったと思います。

終戦後、学校では小学校から中学校まで授業のなかに、中国語が必修科目として取り上げられた。当時、台湾人も本国の言葉が知らなかった。私たちの学校も少し台湾人の生徒がきているため、中国語の学習をしました。したがって、台湾人の先生も多く入ってきました。

朝礼のときは「三民主義」の歌をうたいました。今までの「君が代」に取って代わったわけです。何とも言えぬ気持ちになりました。私たちは少しでも多く工業関係の教科を学習しなければと思うのですが、実際はそうはいきませんでした。でも私は複雑な気持ちで覚えた「三民主義」の歌ですが、今でも初めの部分は覚えています。仮名書きですが、「サンミン ツイー ウーツォン ソーツォン イーチェン ミンコー イーチン ターツォン……」旋律が朗々としていて、すべてを包み込むという曲想で、私はひかれました。そのうち日本人の学校は廃止、もちろん職員も退職

という事態がきました。母も職を失い、その上、職員住宅から即刻出よ、という指令が、国民政府から出されました。この時機を待っていたように、かねて日本人にレジスタンスを持っていた台湾人が表にでてきて、日本人排斥運動があちこちで起こりました。特に警察にそのほこ先が向けられました。「日本人必ず帰国すべし」の命令も間もなく出たが、一体それはいつなのか、それまでどう生きていけばよいのか、不安におびえる日本人の周りを、ある意味では逆の立場になった台湾人が取り囲み、様子を見ているという形になったのです。

しかし、このような状態に、やや和らいだ雰囲気が出てきました。それは中華民国の軍隊の台湾への進駐です。私はその状況を彰化の町で見ました。五百人ぐらいの中国兵のなかできちんと軍服を着て、銃装備をしていたのは半分足らず、あとの中国兵は、素足、よれよれの軍服とも付かない服を着て、何やらしゃべりながら豚・牛をひいたり、鶏を数羽逆さにつるした棒を担いでいたりして、出迎えに出た台湾人たちに大き

な驚きを与えた。このことがあってから、台湾人の日本人に対する意識は、今までとは違った好意的なものを感じるようになった。それは引揚げまでの生活の中にいろいろな形で表われた。

私たちの住むところをいろいろと心配してくれたのは、台湾市場の管理人さんで、市場一部を間仕切りして、差し当たり住む所を提供してくれた。当面の生活費は引揚げまでに、それぞれ家財道具を処分するため、職員住宅にいた家族たち合同で市場の片隅に店を開いた。売れ行きはまあまあというところ。台湾人たちは、生活習慣の違う我々日本人の家財道具をよく買い上げてくれた。中には足元を見る人もいたが、おおかた順調に進んだ。しかし実際、生活はこれだけでは成り立たない。店は交代で番をし、ほとんどの人が日雇いに出た。私も在学証明書を書いてもらって、引き揚げるまでとにかく働くことにした。

日ごろ、母の教え子で親しくしていた台湾人から、壁塗りをやらないかといわれ、すぐる思いで行った。壁塗りなどはほとんどなく、土こねと土運びでした。

でも家計の足しには少しなつたようです。私たち日本人がこうした労働をしている姿は、今までの台湾人には見たことはないわけです。「リップンギーナー、リップンギーナー」(日本の子供の意) 近所の台湾人の大人や子供が見にきました。屈辱感でいっぱいでした。でも、そんなことは言えない。母は交代で回ってくる店番と、日本人同士が組になっての市場の手伝いをしました。引き揚げるときは一人千円まで持ち帰ってよいといわれているので、せめてそのぐらいはと思い頑張りました。壁塗り手伝いのあと、農家の手伝いで草取り、作物の運搬、雑用などいろいろ経験しました。

私たち日本人の当時おかれた立場に、割り切つていく人と、そうでない人とのギャップが共同生活の中にわずかに出てきた。よく世話をしてくれた台湾人にお礼の言えない人、気持ちは分かるのだけれど、そんなに今までのことにこだわらなくても……と思いました。同じような感情がやはり、逆の意味で全部の台湾人でももちろんないが、あったのではないかと思います。

共同生活の中で話題になることは、お互い引揚げ先

への不安です。本土の様子が全くつかめず、また、日本人の島内での移動が禁止されたため、親戚同士集まって引揚げ先を相談することもできず、さらに不安が重なった。

とにかく大都市・中都市は駄目、田舎ならまあまあ良いのではないか、しかし、全然身寄りのない所へはという気持ちもあり、大変迷った。結局、私たちは母方の祖父の出身地である愛知県一宮市に決めた。

引揚げの時期がほぼはっきりしてきた二十年の一月ころだったか、一人の台湾青年が訪ねてきました。その青年は母が琴を弾くのを知ってきたようで、ぜひ琴を譲っていただきたいと言いました。青年は「私はとても音楽が好き。世界のあらゆる音楽を聴きたいし体験したい」と、熱っぽく話していました。母は八月十五日以来、弾いていません。精神的に弾くことができなかつたのだと思います。ただ大切にそばに置いてありました。青年の話を聞いて母は涙声で「安心しました。この、お琴、かわいがってあげてください」青年は真剣な顔で「ありがとうございます。ではお幾ら

で……」母は手を横に振って「あなたの、その気持ちがとても嬉しいの」母は最後に「千鳥の曲」を弾いて、琴と別れ、青年に琴を渡しました。「ありがとう、ありがとう」と何べんも繰り返しながら去っていった。

終戦になつて、経済的な不安、これからさき私たちはどうなるのだろうか。何とも言えない不安はあつたが、台湾の人たちのそれとない温かさが伝わってきました。引揚げの日が確定してから急に慌ただしくなつた。持って帰れるものは最低の生活必需品、ふとん一組、

衣類は夏冬三着分、お金は現金のみ一人千円、預金は無効。厳しい条件でした。

四、引揚げ

昭和二十一年三月二十五日、いよいよ今日から花壇地区の私たちも、引揚げの途に着くことになった。確か朝六時集合だつたと思う。花壇駅に行くと、大勢の台湾の人たちが集まっていました。よく見ると親しかった人や、母の教え子たちの姿が見えました。それぞれ名を呼びあいました。「人見先生お元気だね」「健ちゃん頑張つて」思いがけないことでした。これからの

不安で頭がいつぱいだっただのが、何とも言えぬ感激で胸が熱くなりました。思いつきり手を振って「ありがとう。ありがとう。ドゥーライ。ドゥーライ」(ありがたいとの意)と、汽車に乗ってから私も私は身をのりだして手を振り叫びました。やがて、ホームも小さくなり緑の中へ(台湾は常夏です。だから三月でも緑は十分です)消えていきました。

花壇から彰化へ行き、そこで下車、他地区の団体と合流をして再編成を行い、基隆港に向かうことになっている。

いよいよ、彰化から基隆へ、思い出の台湾と別れる最後の寂しい汽車の旅と想ったのですが、私たちが乗せられた汽車は貨物列車でした。すべての引揚者が貨物列車ではなく、配車の都合でそうならしく、仕方がなかったわけです。しかし基隆港駅へ着くまで、夜行列車での約六時間、暗い貨車の中で身動きできず、便所は停車駅で降り、短い時間ですまし、乗り降りのときは貨車なので、ステップがなく危険でした。

基隆港では貨物倉庫で二泊し、乗船を待ちました。

その間、持ち物検査が数回行われました。中国兵とアメリカ兵、四、五人でグループを組んでいました。やはり私たちは敗戦国なのだという屈辱感が、ぐっと頭のうえに乗っかってきたような気持ちでした。

昭和二十一年三月二十九日、私たちの上陸する港は、和歌山県の田辺港と聞かされ、アメリカの軍用船リバティーに乗りました。私たちは船底でした。彰化を出发してから暗いところばかりという感じです。船中での食事配布は甲板で行われました。当番になった者が甲板に取りに行きましたが、波の荒い日は大変でした。基隆を出港して翌日、甲板に張られたテントの前で、数人の人が手を合わせていました。テントの奥に、四十歳ぐらいの男性が横たわっていました。周りの人たちの話から、この男性は食事の当番で、甲板に上がってきたところで急に倒れたそうで、身寄りもなく一人だけだとのこと、お互いどうすることもできず、手を合わせるだけでした。日の暮れる前、テントの中には亡くなった方のお姿はなく、「水葬にされたんだ」という声が聞こえた。

私は昭和十五年、内台航路で台湾と内地を往復した
ときのことを思い出しました。もう戦時中ではあつた
けれど、船旅の楽しさを子どもながらも感じていたが、
リバティーの船底の今の自分の姿と全く別人のでは
ないかと、考えさせられました。しかし、内台航路も
十八年に入ってから多くの汽船が、基隆を出港して
間もなく、アメリカの潜水艦に撃沈されました。「富
士丸」「高千穂丸」「大和丸」、私にとつても懐かしく、
写真まで集めていた客船です。

リバティーでの四日目の朝、四月一日紀伊半島がも
う間近に見えました。「ああ、日本か……」多くの人が
甲板に出て、それぞれの思いで見えていたと思います。
静かに港内に進んできて家の屋根・お宮さんの鳥居・
港に止まっている漁船など、静かな風景です。私たち
の心の中と違って……

この港ではリバティーは接岸できないので、私たち
は小船に乗り移って上陸した。上陸したとたん全身消
毒で真っ白になったことを覚えてる。とにかく田辺
を出て京都へ行くまでは大変目まぐるしいスケージュ

ルだった。京都で今まで苦勞を共にしてきた仲間と別
れることになる。「いつかは会いましょう」「ここまで
きたのだから、とにかく生きていかなくては」「体だ
けは……」お互い声を掛け合った。でも窓外を走る内
地の景色、特に戦災を受けた町を見たときは、台湾ど
ころでない生々しさを感じた。今から母と二人で行く
愛知県一宮市はどうか不安でいっぱいでした。

京都駅でお互いに別れを告げ、西へ東へと散ってい
きました。京都で東海道線に乗り換えて、尾張一宮へ
向かいました。今まで乗っていた列車は引揚者専用だ
つたが、一般の列車に乗るのはこの時がはじめて。敗
戦後の車内のすさまじさにびっくりもし、半ば恐ろし
くもありました。日本にとつては表通りの東海道沿線
の荒れた町々の姿、日本は負けたのだという感を深く
しました。ふと台湾の戦後の車内の様子や、かなり爆
撃は受けたけれど町の雰囲気の違いを思い浮かべた。
なんとかして台湾に残っていたほうが……と気持ち
複雑でした。

一宮に近づくにつれてこれからの生活はいつたいど

うなるのか、待っているお金は二人でわずか二千円、今日からこのお金ですべてを賄っていくと、果たして生きていけるのだろうか。車内での会話を聞いていると、私たち親子にとつて、驚くことばかりでした。

尾張一宮駅のホームに降りて、大きな不安が現実になりました。私たちは母方のいとこを頼って一宮に来たのだが、駅前その家はなく、駅前に飯店舗を立てている人に聞いても、全然消息がつかめなかった。母方の祖父は若いとき台湾に渡り、竹材豊富な台中州竹山街で扇骨工場を経営した。その祖父は台湾で結婚（祖母は長崎の出身）し、亡くなるまで台湾で一生を送った。

しばらく駅前に立ち尽くしたが、祖父の出身地、起町（現在は尾西市）に行けば何か手がかりがつくのではと、母の昔の記憶を頼りに、起町行きの電車に乗りました。起町はほとんど爆撃も受けておらず、「昔からの町並だよ」と、母もホッとした感じでした。しかし、一つ大きな心配があります。私たちは何も連絡せずに引き揚げてきたのです。もちろん、互いの連絡も禁止

されていたのだから、やむを得ないのですが、食糧事情のもっとも悪い時に家に転がり込むことになったのだから……。

終点で電車を降り、叔父の家は終点の近くと聞いていたので、終点のすぐ前のおもちや屋さんで聞くと、「ああ、うちの筋向かえ、ほれ、あそこだよ」今までの張りつめた気持ちがふつと抜けたような、でもこれからが大変なんだと、改めてぐつと引き締まるのを覚えた。

「台湾から引き揚げてきた人見です」この時の緊張した母の声は、今でも私の耳のそこにはつきり残っています。奥から母のいとこの叔父夫婦と祖母が出てきた。祖母は「ああ。喜代ちゃんかい、よう帰ってこれたわ。たいへんやったなも」その夜は、叔父が「こんなご時世で何もないが、まあさややかな帰還祝いや」と言って一家で私たち親子をねぎらってくれた。

五、引揚者としての生活

戦後の生活の苦しみには、引揚者のみならず被災を受けた人、親兄弟を失った人、震災は受けなくても全

く収入の道を閉ざされた人などいろいろな姿があります。

私がここで引揚者としての生活、としたのは、祖父の代から多くの日本人が渡台し、いろいろな面を通して台湾人との温かい絆をつくつたのだが、それが終戦によって切り捨てられてしまった。その寂しさが戦後の生活の苦しみの中で時々顔を出すのです。台湾のすべての地方がそうであったとは言えないかもしれませんが、でも私はそういう印象を強く持っています。これは私たち親子の財産の一つなんです。

引き揚げて約二カ月間、親戚の家で大変世話になりました。私たち親子には言えない苦労があつたと思います。母は役場に行つて教職員の口を求めに行つたが、保育園の主任保母の口しかなく、でもとにかく食つていかなければいけないので、まず保育園に勤めました。私は近くの高校（当時旧制中学校）に転入学し、家は保育園に住込みという再出発でした。もちろん給料や配給米だけでは食べていきません。引揚者用の配給で手に入った衣服、その他は衣を切り詰めても、それ

を押麦やお米と換えたり、時には「この服では米一升にもならん。足らない分、麦踏みでもやれや」ということで麦踏み、麦刈り、田植えや、田の草取りや、高校時代の私は我ながらよくやつたなあと思います。

ある日、食事中に母の金の差し歯がポロッと落ちました。母は「ああ、これは神様が助けてくれたのだ。この金の差し歯は売れるよ」と言い、いつものと違う雰囲気、この生活も底を突きそうだなと私は感じました。「母さん今度の日曜日、名古屋で売ってくるよ」広小路通りの屋台で貴金属の売買をしているのを見たことがあるので、あそこへ持っていけば間違いないと思いました。母と二人で行くより私一人で行つた方が電車賃も半分だし、母は女だからと言うことで一人で行くからと、何回も言ったのでやっと母は力なくうなずきました。私はこの差し歯、母はもう使えないと言っているが、歯医者さんに診てもらったら、まだ大丈夫、だと言われて、再度母に聞いた。母は「本当にもうだめだから心配しないで」

私は母の金の差し歯を持って出掛けました。

広小路に何軒か並んでいる店に金の差し歯を見せ、少しでも高くと思い、大分あちこち歩きました。やつと何とか高く買ってくれる店を見つけ、現金に換えてもらいました。私はお礼を言つて名古屋駅の方に向かつて歩きだして、数十秒ぐらいして、「おーい、その坊、待て！」私が振り返るのと同時に二人の警官が腕を抱え、「坊、こちらへ来てもらおう」と言つて、派出所に連れていかれました。「そこへ掛けよ」「何を売つていたのだ」「正直に答えるのだぞ」私は事情を詳しく説明した。「本当は未成年はこんなこととしてはいけないんだぞ」「これから気を付けよ。なかには悪者がいて、渡した金を、あとから付けてきて、掏るやつもいるんだ」「気を付けて帰れよ」私はあの時のことを、今考えるとひよつとしたら、後から付けてきていたのでじゃないか、とすると補導されて、かえつて良かったんだなと今しみじみ思っています。

とにかく食べていくだけでもやつとだというのに、母は私をよく高校に行かせてくれたと思います。母は保育園に二年間勤め三年目から小学校へ勤めることが

できました。したがつて、住まいは保育園にいたることができなくて、当時、建築された起町の母子寮に入れてもらうことになったのです。

私の高校時代の服装は引揚者用の配給で手に入った軍服でした。卒業の年、母は、「やつと健ちゃんに学生服を着せることができるよ。長い間我慢したね」と言つて配給の布で仕立ててもらつた学生服を私の前に置いた。ほんとに苦しい生活の連続だったが、あの時の母の涙でいっぱいになった日は、忘れることはできません。私は母と同じ道をと考えていましたが、経済的なことからすぐに進学はできなかったで、まず働いて学費を貯めてと思い、小学校の代用教員の道を選びました。本当は画家になりたいという気持ちは強く燃えていました。住まいの方も母子寮にいる資格が、間もなく無くなるということから、ちょうどそのとき、起町の引揚寮が建築されたので、そこに入ることでできました。やがて県営住宅に、そして現在、定年後、定年少し前に買った小さな家で毎日を送っています。

終戦、そして引揚げですべてを失つたが、今、物質

的なものは私の場合は以前より少し上回ったと思うが、それ以上に引揚者だからこそ得た精神的な素晴らしい財産を得ることができたと思います。

【執筆者の横顔】

人見健氏の父は、台南市で料亭の調理師であった。

人見氏は台湾に生まれ、小学校に在学中、昭和十五年一月、父は神戸に店を持つことを考え、親子二人で帰国をし、その準備にとりかかったが、二月十五日死亡してしまった。

途方にくれたが、母の親兄弟が台湾にいるのでやむを得ず、母子は台湾に戻った。

人見氏は小学校三年生、母は清水南公学校の教員に採用していただき、再出発となった。

人見氏は、昭和十九年に工業高校機械科に進学。十九年になると、アメリカの空襲は激しさを増してきた。

昭和二十年八月十五日、終戦となった台湾で、母は教職を失った。職員住宅も国民政府から出され、住むところもなく困ったが、幸いに、台湾市場の管理人か

ら心配していただいて、市場の一部に落ち着くことができた。

生活に困った母子に、母の教え子から、壁塗り仕事や、草取り、作物の運搬、雑用など斡旋してもらい、大いに助かった。

引揚げが始まったので、母は母方の祖父の出身地である愛知県に決めた。

二十年の一月ごろ、母の持っている琴を譲ってくれという青年が尋ねてきた。音楽が大好きだという青年に、母は最後の琴を弾き、かわいがってくれるようにと、その琴を渡した。

引揚げが始まり、花壇駅から出発に際し「人見先生元気でネ、健ちゃん頑張つてネ」と、母の教え子や、親しかった人々から、温かい思いがけない情愛の別れの言葉をもらった。

日本への引揚げは、愛知県尾西市起町、母方の祖父の出身地を訪ねた。母のいとこの叔父夫婦と祖母ができて、「喜代ちゃんかえ」と言つて感涙のるつぽと化した。

その後、母は保育園の主任保育を二年つとめ、三年目に小学校に復職できた。人見氏は高校卒業後、小学校の代用教員を四年ばかり勤めたあと、教育大学の音楽科に進み、小さいときから好きだった音楽を学び、卒業後は中学校の音楽教師となった。

人見氏の母子共々、哀話の陰に限りなき情愛の絆の尊さを知る。

(引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助

内蒙古自治区張家口よりの引揚げ

大阪府 畑野憲次

昭和十二年四月、茨城県笠間稲荷で有名な水戸線の笠間駅構内の鉄道宿舎で生まれた私は、水戸鉄道管理局保線区に勤務する父と母、それに三歳年上の兄との四人家族の一員となりました。

明治四十年生まれの父の生家は、東京の大井町で零

細な印刷屋を営んでいましたが、九人兄弟の子沢山の家庭では、御多分に漏れず貧乏暮らし、子供のころから家の仕事の手伝い、使い走りを余儀なくさせられ、学校も中学は夜間へ進み、苦学した父はやがて当時の鉄道省(国鉄)に入り、東京鉄道管理局保線区を振り出しに、水戸管理局の土浦へ転勤、父は二十六歳の時にここで新所帯を持ったそうです。

翌年、父は、水戸に転勤し、そこで長男が誕生、三年後には私が誕生、しかし、実家は相変わらずの薄い印刷屋、このままではという思いが募り、当時のだれもが目指した大陸での飛躍を決心し軍属となり、昭和十三年、勇躍単身にて支那へと渡りました。

雌伏二年、華北交通に働き場所を得て、やっと生活も安定し家族を呼び寄せることができたのは、昭和十五年のことでした。このとき、父が故国に残したものの、それは念願の墓所でした。大金をはたいて当時としては立派な墓を建て、私の誕生の前年に亡くなった祖父の法要を果たし、心おきなくこれからの生活の拠点、支那への長い旅の準備の緒についたのでした。